藤沢市
藤澤浮世絵館
FUJISAWA UKIYO-E MUSEUM

# 浮世絵館だより

2022年11月
Vol.19

もくじ

展示紹介
喜斎立祥　二代広重と呼ばれた絵師 …… P1～2
富士と龍―二代歌川広重が描いた「登龍（富士越の龍）」 …… P3
東岳寺に残る広重の墓碑と記念碑 …… P4
浮世絵こぼれ話15　藤澤浮世絵館コレクションストーリー …… P5
二代目オニカゲ学芸員のページ⑧
高知和紙の旅/浮世場なれ/編集後記 …… P6

# 喜斎立祥（きさいりっしょう）

## 二代広重と呼ばれた絵師

**会期**　2022年11月3日（木／祝）～12月4日（日）

【図1】二代歌川広重「諸国名所百景 相州七里か浜」安政6年(1859) 藤沢市教育委員会所蔵

【図2】二代歌川広重「東海道　藤沢」文久3年(1863)　藤沢市教育委員会所蔵

【図3】二代歌川広重「東海道五拾三駅 藤沢　追分道」慶応元年(1865) 藤沢市教育委員会所蔵

歌川広重（うたがわひろしげ）は浮世絵界を代表する風景画の名手です。実は、その広重には二代目がいました。通称「二代広重」で知られているこの浮世絵師は初代広重の弟子で、江戸時代の末期から明治時代の初期まで活動しました。タイトルにある「喜斎立祥（きさいりっしょう）」とは二代広重の晩年の画号（がごう）です。

これまで、師匠の偉大さの陰に隠れ注目されづらかった二代広重ですが、師匠と同じように江戸や東海道を中心とした風景画を多く残しました。当時も観光目的などで人気のあった江の島（図1）や、東海道の宿場町である藤沢宿（図2、3）もよく描いており、藤沢市にとっては大事な絵師です。今回は広重ゆかりの地である足立区立郷土博物館と、国内でも有数の浮世絵を所蔵している公益社団法人川崎・砂子（いさご）の里資料館からも作品をお借りして、師匠の画風を引き継ぎつつ独特の絵心も感じられる二代広重の作品をご紹介する展覧会を開催します。

# 二代広重の生涯と画業

▼画面左側の短冊に「二世広重」とある

【図4】二代歌川広重「名所江戸百景 赤坂桐畑雨中夕けい」安政6年(1859) 4月　足立区立郷土博物館所蔵

二代広重は文政9年（1826）に生まれ、弘化年間（1844－48）頃に重宣という名前を用いて浮世絵師としての活動を始めました。初代広重にひたむきに仕えていたようで、初代広重の遺言状には「久しく随身しているため、脇差を一本譲るように」と書き残されているほどです。

初代広重が安政5年（1858）に没した後、重宣は初代広重の養女であるお辰に婿入りし、「歌川広重」を襲名して二代歌川広重となりました。その「二代広重」を宣言した作例が「名所江戸百景　赤坂桐畑雨中夕けい」（図4）です。『名所江戸百景』は江戸の名所を描いた合計120枚の揃物（内、目録が1枚）で、初代広重が安政3年から安政5年に118枚を手掛け、ここに二代広重が安政6年に1枚（図4）追加したかたちで完結となりました。本図の落款が「二世広重」となっており、これによって歌川広重が襲名されたことがわかります。二代広重は初代広重と同様に、江戸や東海道の揃物（図5）をよく描き、精力的に活動しました。

▼江戸の揃物の一例

【図5】二代歌川広重「東都三十六景 湯しま天神」文久2年（1862）公益社団法人川崎・砂子の里資料館所蔵 ©2022川崎・砂子の里資料館

しかし、二代広重は慶応元年（1865）に突然お辰と離婚し※、家を出てしまったといいます。その後も浮世絵師としての活動は続けますが、浮世絵師としての名前は二代広重から喜斎立祥に改めました。広重の名前ではなくなりましたが、それでも風景画を描くことはやめず、江戸や東海道の名所に加えて横浜絵（図6）を頻繁に制作するようになりました。二代広重は「歌川広重」という名前の重さから解放されたかのように思われましたが、明治2年（1869）に44歳という若さで亡くなりました。二代広重の人となりを伝えるエピソードは少ないですが、作品を通して二代としての苦悩や絵師として自分の個性を作品に残そうとする懸命な姿を見ることができます。今回の展示で、より多くの方に二代広重と呼ばれた絵師の存在を知っていただければ幸いです。

▼横浜絵

【図6】二代歌川広重「横浜本町海岸仏郎斯役館之全図」明治2年（1869）公益社団法人川崎・砂子の里資料館所蔵 ©2022川崎・砂子の里資料館

※二代広重と別れたお辰は、その後すぐに初代広重の門下であった歌川重政と結婚します。重政は歌川広重を名乗り（自称二代広重、現在は三代広重として扱われる）、彼もまた広重の名前を継いだのでした。

# 富士と龍――二代歌川広重が描いた「登龍（富士越の龍）」

山本ゆかり（公益社団法人川崎・砂子の里資料館 学芸員）

二代歌川広重が描いた「登龍（富士越の龍）」（図1）は、水中から飛翔した龍が空に向かって力強く登るさまを描きます。龍は青黒い雲をまとい、その暗雲は天空をも神秘的な色に染めています。さらに奥には龍が目指す富士の峰がそびえ、富士と龍、雲、波とで構成される雄大な世界が広がります。

富士と龍とを取り合わせる図様（以下、富士雲龍図）は、江戸時代に入って以降、描かれるようになりました。最初の作例は、江戸幕府奥絵師の狩野探幽が寛文2年（1662）に描いた「富士雲龍図」（慶瑞寺蔵）であると考察されています。ではなぜ富士と龍とをひとつの画面に描くようになったのでしょうか。そのヒントが江戸時代の漢詩にあると指摘されています。

漢詩人で書家の石川丈山は元和9年（1623）に「富士山」と題する七言絶句を詠みました。そのなかに「神龍栖み老す、洞中の淵」という一節があります。「富士山の頂上にある池のなかには、久しく龍が住む」というのです。

丈山は探幽と親交があり、探幽は丈山の肖像を描いています。17 世紀の文化人の間で、富士に龍が住むというイメージが共有されていたことを窺わせます。

さらに藤醒梅も寛文12年（1672）に名古屋から江戸へ赴いた際の紀行『東海紀行』で、「此の山、素より神龍の住みたる有」と同様のイメージを漢詩にしています。

【図1】二代歌川広重「登龍（富士越の龍）」文久3年（1863）
公益社団法人川崎・砂子の里資料館所蔵
©2022 川崎・砂子の里資料館

その後、多彩な絵師が富士雲龍図を描きました。狩野派絵師も複数の作例を残しており、特に狩野永岳が描いた「富士山登龍図」（嘉永5年・1852、静岡県立美術館蔵）が名品として知られます。さらに江戸琳派、文人画をはじめ幅広い画派の絵師たちがこの図様を手掛けました。浮世絵では葛飾北斎の墨摺本『富嶽百景』（天保6年・1835）のなかの「登龍の不二」や、最晩年の肉筆画「不二越龍図」（嘉永2年・1849、北斎館蔵）がまず浮かぶでしょう。

前例作品はいずれも墨を基調とした大胆な雲龍の表現が印象に残るものでした。一方で今回ご紹介する二代広重の「登龍」は、錦絵（多色摺木版画）の独特な風合いを特徴とします。墨の濃淡や線描、筆触ではなく、墨、灰色、水色の色版の重なりで雲が表現され、龍の体躯には赤、水色、薄い黄色が摺り重ねられます。雲の一部には雲母が蒔かれて、微細な光沢を放ちます。

木版の色面で構成されることで、水墨画の伝統的描法とは異なった斬新な雲龍の姿が浮かび上がります。また端正に佇む富士の繊細な線や、翻る波を表す動きのある線など、多彩な線描表現も本図の見どころとなっています。

※主要参考文献
山下善也「富士の絵、その展開と諸相」（『富士山と日本人』青弓社、2002年）
岡倉捷郎「富士山と龍―「富岳登龍図」の諸相と性格」（『神龍の棲む火の山』梟社、2020年）

# 東岳寺に残る広重の墓碑と記念碑

小林　優（足立区立郷土博物館学芸員）

名所絵の名手、歌川広重。その墓碑が、東京都足立区伊興本町の東岳寺に残ります。

広重の菩提寺である東岳寺は元々、現在の台東区松が谷一丁目にあり、広重が没した安政5年（1858）も、同地に所在していました。その後、戦後の区画整理に伴い、昭和36年（1961）に現在の場所へ移転します。広重の墓碑は、広重の記念碑と、広重に心酔した戦前の浮世絵研究家、ジョン・スチュワート・ハッパー（1863-1936）の墓碑と並列されて、東岳寺の庭園で一つの空間を形成しています。

広重の没時に建立された墓碑は関東大震災と第二次世界大戦の戦災で損壊し、現存するのは移転前の昭和33年（1958）、広重の百回忌に再建された墓碑で、美術史家の藤懸静也の書による「一立齊廣重墓」の字が刻まれたものです。

一方で、中央に置かれる記念碑は大正13年（1924）の建立で、階段形のモニュメントの中央に「廣重」の字の刻まれた碑が置かれ、その下に広重の辞世「東路へ筆を残して旅の空西の御国の名ところを見ん」が刻まれた銘板が嵌められます。

この後、昭和12年（1937）にハッパーの墓碑が建ち、現在の組み合わせとなりますが、広重の墓と記念碑は昭和15年（1940）、東京都指定文化財（旧跡）に指定され、東岳寺移転に伴い、ハッパーの墓碑と合わせて足立区に移されました。

【図1】広重の墓碑と記念碑
記念碑を中央にして、右に広重の墓、左にジョン・スチュワート・ハッパーの墓碑が配置されます。

移転前、東岳寺では広重の命日である9月6日に、浮世絵の蒐集家や研究者が作品を持ち寄っての鑑賞会を行っていたと伝わります。移転を境にこうした会は行われなくなっていましたが、平成12年より、浮世絵研究家の稲垣進一氏を中心とする「広重会」により、9月6日の広重忌法要に合わせ「一日だけの広重展」が同寺で行われるようになり、平成31年、足立区立郷土博物館へこの事業が引き継がれました。

歌川広重を慕う人々の思いは、場所を変え、時代を越えて、今も連綿と受け継がれています。

※東岳寺＝東京都足立区伊興本町1-5-16

※「一日だけの広重展」は現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止しています。再開時期は未定です。

# 浮世絵こぼれ話 15

## 藤澤浮世絵館コレクションストーリー

【図1】歌川芳員「東海道五十三次内　藤沢」嘉永6年（1853）藤沢市教育委員会所蔵

藤沢市藤澤浮世絵館のコレクションは郷土資料の一環として、藤沢の地域にゆかりのある浮世絵を中心に形成されています。特に東海道の藤沢宿や江の島を描いた浮世絵を多く所蔵しています。しかし、藤沢にゆかりのある浮世絵は直接地域を描いた作品のみではありません。藤沢に関係のある物語の浮世絵もコレクションの一角を担っています。中でも『小栗判官照手姫伝説』は藤沢を代表する物語です。

『小栗判官照手姫伝説』は仏教の教えを語る民衆芸能、説教節の「おぐり」を元にした物語です。江戸時代には浄瑠璃、歌舞伎、読み物など様々な媒体に取り入れられ、広く知られていました。『小栗判官照手姫伝説』は藤沢にある時宗総本山の藤澤山無量光院清浄光寺（遊行寺）と深い縁があり、遊行寺境内にある長生院には小栗判官、照手姫、そして小栗判官の愛馬の鬼鹿毛のものとされるお墓があります。また、藤沢市内を流れる引地川の由来は物語の中で照手姫が衰弱した小栗判官を手車に乗せて引き出した場所であるからとする説もあります。これらの影響から「藤沢といえば小栗判官」と江戸時代には知られるようになりました。

当館所蔵の『小栗判官照手姫伝説』を描いた浮世絵には武者絵、役者絵、戯画など様々な作品があります。その中でもひときわ藤沢との強い縁を感じられる作例は、歌川芳員の「東海道五十三次内　藤沢」（図1）など東海道五十三次を描いたシリーズものの藤沢宿の図に『小栗判官照手姫伝説』の場面や登場人物を描いている作品です。東海道五十三次を描いたシリーズはほとんど各図に宿場の光景またその宿場を象徴する名物、名所、物語、故事などを描いています。このことから『小栗判官照手姫伝説』が江戸時代には藤沢を象徴するものとして広く受け入れられていたと推測されます。

【図2】歌川国貞（三代豊国）「小栗判官　中村芝翫」文化12年－天保11年（1815－1840）藤沢市教育委員会所蔵

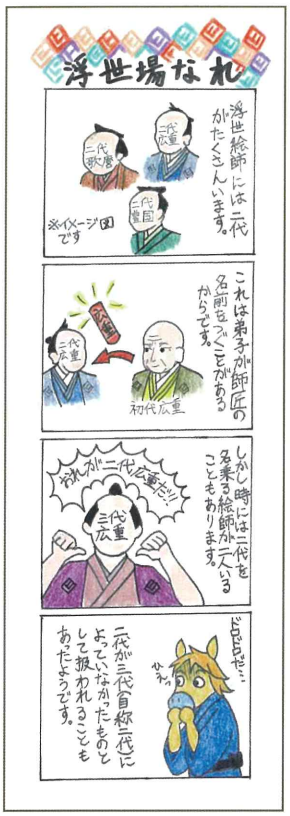
## 二代目オニカゲ学芸員のページ⑧
# 高知和紙の旅

浮世絵をつくる上でかかせないのが和紙です。日本各地で古くから作られていて、特に福井県の「越前和紙」、岐阜県の「美濃和紙」、高知県の「土佐和紙」が有名です。今回はオニカゲ学芸員が高知の和紙について紹介します！

土佐和紙は戦国時代に、現在の高知県で開発された「土佐七色紙」が土佐藩から将軍家への献上品として保護されたことによって、広く知られるようになったとされています。初期の浮世絵には美濃紙・仙花紙・西の内などの和紙が使われていましたが、江戸後期の浮世絵には土佐和紙も使われるようになりました。さらに高知県「いの町」出身の吉井源太が万延元年（1860）に和紙の漉き用具である簀桁の大型版を発明し、和紙の量産が可能になると土佐の紙業はさらに発展しました。そしてなんと、明治時代にはタイプライターの用紙として土佐和紙は海外でも愛用されていたそうです。高知県にある、「いの町紙の博物館」では常設展示に紙漉きの用具や和紙などを展示し、詳しく土佐和紙の歴史を紹介しています。

和紙の生産がさかんな地域には和紙漉き体験ができる博物館や工房があります。今回はオニカゲ学芸員もワークショップを体験してきました！まず、和紙の原料である楮、トロロアオイの粘材、水で作った液体をかき混ぜて簀桁ですくいあげます。簀桁はザルのように水きりの役割をしてくれます。そして残った楮の繊維を乾燥させて和紙を作りました。手漉き和紙は植物繊維が絡み合って出来ているので、私たちがよく使う洋紙より丈夫だそうです。

浮世絵は絵師、彫師、摺師など職人が協力してつくられますが、紙漉き職人も浮世絵をつくる上では欠かせません。土佐和紙をはじめとした和紙がこれからも継承され、愛されていくことを願います。



▲和紙を破いてみると繊維が絡みあっていることがよくわかります。

### 編集後記

今回の展示の主役である二代広重（喜斎立祥）の作品を普段浮世絵館で展示すると来館者から「二代がいたのですね」とよく言われます。二代広重は師である初代広重と比べるとあまり知られていませんが、藤沢市所蔵浮世絵の中には二代広重の作品も多く、浮世絵郷土資料として扱う上で大変貴重なものです。特に初代と二代の描く江の島の形はよく似ていて、「さすが師弟」と思います。本展示を見る前には二代広重を知らなかった方も本展示を通して二代広重に興味を持っていただければ幸いです。

**編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館**
【住所】〒251-0041神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階
【電話】0466-33-0111　【FAX】0466-30-1817
【開館時間】10:00～19:00（入館は18:30まで）
【休館日】月曜日（祝日、振替休日の場合は翌平日）
※その他、展示替えのために休館日がございます
【HP】 藤沢市藤澤浮世絵館 で検索

facebook：藤澤浮世絵館
公式アカウント
⇦このマークが目印です。「いいね！」お願いします。
キュン♥藤沢 するまち。